

第4回モニタリング部会（平成28年2月3日開催）での指摘事項と対応方針（案）

意見者	指摘事項	対応方針
泉委員	水温と濁度について、定期水質調査と自動水質調査の図表では濁度の出方が一致していないようだが、同じデータを使用しているのか。	観測地点が異なるが近傍である。 データの不一致については、H28以降の調査にて自動水質調査地点でも定期水質調査と同じく採水を行い検証する。
松井委員	ダム容量が上がったために、濁度が下がっているようなデータについて、次年度に向けダム湖内よりも放流水や流入河川に注視が必要である。また、水温も平均化されているかはまだ判断できないが、川端ダム下流の夏季の水温や冬期間及び湛水時期の水温についても、次年度以降に注視したい。	冬期間の計測データについては次年度報告する。
岡村委員	植生の外来種であるハリエンジュについて、湛水の影響により、死んだか死んでいないかというところは、外来種を駆除する上で重要な問題であるため、枯死木について地上部、地下部を明確にすること。	枯死木の定義について明確にする。
	モニタリング計画について、試験湛水により裸地化した所に侵略的外来種が急激に侵入する危険性が非常に高いので、モニタリングが必要である。	次年度以降、湛水の影響による裸地化範囲に注視して調査を行う。
眞山委員	H27に増えた魚種はコイ、フナ、ワカサギの湖岸に産卵する種と、トミヨ属トゲウオ類、ジュズカケハゼの湖岸に生息する種であり、水位上昇により湖岸の勾配が緩くなったため増加したと思われる。湖岸の環境の変化が今後どのように影響を及ぼすか、湖岸に産卵及び生息する種について注視していきたい。	次年度以降も調査を継続していく。
	エゾホトケドジョウは貴重性の高い種であるが、本来は下流に生息する種である。恐らくコイなどを放流した際に混じった可能性があり、明らかに移入種であると思われるため、今後、扱い方に留意が必要である。	次年度以降も調査を継続していく。
中井委員	案内標識、誘導サインについて、ダムの所にある案内標識は分かりやすく良いが、ダムに来るまでや、通過した人たちに寄ってもらうシステムの誘導サインを作った方がよい。	次年度以降、誘導サインについて検討する。
	計画概要図は、一般の人はすごく関心があり、地域住民にとってダムの効用が分かりやすいと思うので、施設説明の案内板や事務所内のラウンジのように人の集まる場所に掲げるのは有効である。	事務所内展示室に計画概要説明パネルを掲示する。
	濁度について、視覚的に評価するために、同じ視点場からの景観写真を使用すると濁度の判断がしやすい。	景観写真の活用について検討する。
(欠席者意見)		
岩佐委員	ユスリカについて、ユスリカ全種を種レベルまで同定するのは困難であるため、次年度以降、優占する数種だけでも、種レベルまで同定することが望ましい。	次年度調査計画にユスリカの同定に関する留意点を追記する。
	平成28年度に実施する湛水後の昆虫類調査について、ベルトトランセクト調査（植生）では、大きな植生の変化はみられないため、周辺環境の違いについて詳細のデータを取得することが望ましい。	次年度以降の調査を検討する。
柳川委員	クマタカ・オオタカの繁殖状況等に変化があった場合、他の猛禽類の行動が両種に影響を与える可能性も考えられるため、今後も継続して多様な猛禽類の繁殖状況を確認することが望ましい。	次年度以降も調査を継続していく。
	コウモリの個体数に着目し、生息数の増加を確認することが望ましい。また、今年度と同様に、バットボックス等の利用状況を確認し、標識個体を確認された場合、目視では同定が困難な場合のみ、捕獲して同定することが望ましい。	次年度以降も調査を継続していく。